
夏になる夢を見た

柳瀬しなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏になる夢を見た

【Nコード】

N5730H

【作者名】

柳瀬しなこ

【あらすじ】

カヤは夏が好きだった。だから私は夏が嫌いだった。カヤがどうして夏が好きなのかを、知るまでは。

「夏になる夢を見たんだ」

カヤは真面目な顔をしてそう言った。日に焼けて赤くなった肌が目に痛くて、目を反らせたのは私。じりじりと地面を焦がす太陽が憎いなあと思う。だって、暑いから。どうしてもまた顔を上げなければならぬ。

「俺は多分、次の秋を見ることはないよ」

カヤの右腕。肘の内側には四角い白い絆創膏が貼ってあった。ずっとずっとそこには、銀色の針が刺さっていたのに。うつすら赤く滲んで、ああやっぱり針が刺さってたんだわと思った。

一週間前までカヤは白い部屋の中にいた。あんまり白くて殺風景で寂しいから、毎日花を摘んでは持って行ったけれど、花はばい菌だからとカヤのお母さんに駄目と言われたのが、つい昨日のことみたいで。いつもは窓なんか開いてなくて、でも私が行くとカヤは窓を開けてとせがんだ。風が部屋の中を通るのが気持ちいいんだと。

それでまた、ばい菌が入るから窓を開けるなど、カヤのお母さんにしかられるのは私。

「何でそんなことゆうの」

「言つたろ。夏になる夢を見たって」

夏。なつ。

その季節に、カヤはいつもこたわった。暑いだけじゃないか。汗が止まらないし不快だし風は冷たいし台風が来れば田んぼは全滅しちゃうし雨が降れば雷が落ちるし蝉は煩いし。私は夏が嫌いだった。カヤが、夏を好きだったから。海よりも川が好きで、よく一緒に泳ぎに行った。冷たくて気持ちよくて、その一瞬だけが好きだった。

カヤは、夏が大好きだったから。その季節には特に、私を連れ出して外に出ることが多かった。一緒に手をつないで汗だくになって、

太陽が沈むまで隣にいた。だから去年の夏まではカヤも私も日焼けが激しくて。けれど今は二人とも白い。私は日焼け止めを塗って、カヤは部屋の外へ出なかったから、白いまま。この一週間だけで、少しだけ日焼けをしたカヤの肌を、何故か懐かしいなと思った。

「明日、行っちゃうんでしよう」

そうしてもう、この町には戻ってこないのだ。

たくさんの機械に囲まれた、あの白い部屋とは違う白い部屋のあの大きな建物へ、カヤは吸い込まれてゆく。帰ってこない。遠くの、ずっと遠くの町にある。私が一人で行ける距離じゃない。

だからこうしてカヤと歩くのは、今日が最後なのだ。

最後、だから。クローゼットにしまっておいた、お気に入りのワンピースをおろした。春先に行った店でセール品になってたワンピース。けれどとても可愛くて。カヤが帰ってきたら一番に見せるのだと、今日まで着なかった。もう、このワンピースは着れない。だって、このワンピースを見せたいと思うのは、カヤだけなのだ。

「俺は、アキのことが好きだよ」

遠くの入道雲を見つめてカヤは言う。さっきまでだらしく伸ばしていた手をポケットに入れて、ちよつと格好をつけながら。でも笑えなかった。ふふ、って。いつもなら簡単に笑えるの今日は。カヤの横顔が、遠すぎて嫌だ。

行っちゃうの。

行っちゃうの？

私を置いて、遠くの、名前も知らない町に。

「だから、俺は行くよ」

「嫌だよ」

「アキ」

「嫌だよ。カヤが行っちゃうのは、嫌だよ」

こんな風に泣くのは、小学生の頃以来かもしれない。涙が知らな

いうちに頬を伝って慌ててしゃがみこんだ。ひざを抱えて嗚咽交じりの、汚い泣き方。

好き、カヤが好き。ずっとずっと好き。カヤがああ白い部屋に行ったときも、毎日だって会いに行っただけでしょう。毎日怒られて、それでも花を持って行ったのは、入り口から少しだけカヤが顔を出して花を見て笑ってくれたから。たった、それだけもらえればカヤのお母さんに怒られることくらい何もなかった。幸せだった。

行ってしまうの。もう、花を持って行くことも出来ない。あの笑みを見ることも出来ない。私が見たいカヤは居なくなってしまう。カヤが、私の隣から居なくなってしまう。そんなのは絶対に嫌なのに。

「俺は、夏が好き」

「知ってる」

「何でか知ってる？」

「夏休みがあるからでしょう」

「はは、それもあるけど」

カヤは笑いながら私を見る。そうして私の手をとって、立ち上がらせた。真面目な顔をしたカヤと、目が合う。

「夏が終われば、秋が来るから」

私の顔を指差して、今度ははにかんで笑った。そうして近づいてくる。二歩、一歩。暑い、うっすら熱い。距離はゼロになった。少し汗を吸ったシャツに包まれてる。この腕はカヤの腕。いつかこうして抱きしめられた。それはもうずっとずっと遠い記憶。

「本当は秋が一番好きだ。でも、秋が終われば冬が来るだろう。そうしたら寂しいじゃないか。好きなものが、いなくなってしまう。でも夏は違うだろう？　終わったら会えるんだ。楽しみだろう、嬉しいだろう。待ち遠しくて早く秋が来ないかと、そう思うんだよ」

だから夏が好きなのだ、と。

「私は、いつでも居るのに」

「それに気づくのに、随分時間がかかったんだよねあ……」

カヤの腕は、体は信じられないくらいに細くなっていた。力を入れて抱きしめていいのかわからない。あの時のように思い切り抱きしめていいのか。それでも、カヤが私を抱きしめるので。泣きながら、私を抱きしめるので。私も泣きながらカヤを抱きしめた。強く、弱く。

本当は、怖いよ。

小さな声でカヤは言った。

アキに会えなくなるのは、アキが俺の傍から居なくなるのは、一人になるのはとても怖いと。小さな、弱弱しい声でカヤは泣きながら言った。震えてるのは私なのかカヤなのか、わからなかったけれど。震えが止まるまで、ずうっと抱きしめていた。

とても暑い日だった。太陽は頭のとっぺんにあつて、影は足元にちょこんとあるだけ。蝉は相変わらず騒がしくて、太陽がじりじりと照り付けるから頭が痛くなる。汗が吹き出て止まらない。暑い。

夏の日。

キスをした。

汗だくのまま、ただ触れるだけのキスをした。それが最後だとわかっていたから、出来るだけ長く。

さよならの味がした。

向日葵が枯れてしまったので、庭に咲いていた秋桜を摘み取って飾った。ピンクと白と茜色。三色が風に揺れて、綺麗ね。もうすぐ秋が来るのよ、カヤ。もうすぐ夏は終わるのよ、カヤ。あなたの大好きだった夏が。押入れの中にしまってた麦藁帽子を何年か振りに被った。カヤと一緒に遊びまわったときの、懐かしい匂いがした。

「もうすぐ秋がくるの」

夏になる夢を見た。だからあなたは、もうすぐ私に会いに来る。言っただけでしょう。夏が終われば秋が来るのだと。アキが来るのが待

ち遠しいのだと。

カヤ。

私はずっと此処に居るよ。此処で、待っているよ。あなたが会いに来ることを。それまでこうして毎日花を飾る。あなたの形が汚れないように、綺麗に片付けておくから。もうすぐ、夏が終わる。入道雲が流れてゆく。蝉はもう、それほど煩くはない。夏の匂いが薄まって行く。

カヤ。

少しだけ、夏が好きになった。夏になったあなたが、私に会いに来てくれるから。

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5730h/>

夏になる夢を見た

2010年10月8日15時52分発行